

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第95号

毎月発行

発行 2020年(令和2年)4月16日 木曜日

2020年(令和2年)4月16日 木曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、66歳、新人の歴史ドキュメンタリー作家。現在、日本刀の真のルーツを発掘した映像【鬼がつくった日本刀】を制作中。3月から公開予定。趣味は縄文研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。



第101号目から「東北再興」に変更 1300年間の長期衰退の流れを断ち切り 再興を目指す東北を激励する新聞へ

九月で一〇〇号到達

当新聞がこのまま順調に毎月発行を重ねていけば、今年の九月に、大きな区切りの一〇〇号目を迎える。発刊当初は十号に辿り着くかどうかとほとんど心配したが、いまではとてもなつかしい。

かつてはネタ探しに苦労し、たかが八面のタブロイド新聞ではあるが、すべて文字で埋めるとすると四百字詰め原稿用紙、約九十五枚のボリューム。かなりの重労働で途方に暮れた。

ここまで続いたのもひとえに、たくさんのお手紙や情報提供者の方々を支えられたおかげである。

また読者の方々の励ましも後押ししてくれた。発行者として、毎号読んでいただけの読者がいるということ、これは勝る発行継続のモチベーションはない。紙面を借りて、上記の方々に感謝を申し述べたいと心から思う。

当新聞は一〇一号から 東北再興に名称変更

さて、第一〇一号目からは何か変化があるかと問われれば、新聞の名称をえようと検討中である。

「東北復興」から「東北再興」に切り替えるつもりだ。

長期低迷を続ける東北の「東北再興」とは、頭がおかしくなったのではないかと疑う方もあるかもしれない。

千三百年前から出直す東北

当新聞では最近、今から千三百年前の東北というテーマを何度か取り上げた。千三百年前という時代は、東北が大きく変化した時代である。もちろん日本も、それは東北が大和朝廷に

よって完全に支配下に置かれた大きな節目の時代。その後、大和朝廷に表立って反抗する地域もなくなった。

それまでは、東北には「自治」があった。大きな都市・集落がたくさんあったわけではなく、緩やかに連携した集落間のネットワークで分業もできていた。

しかも東北エリアのみに閉じず、本州や北海道や日本海を囲む「北方交易圏」での交易も盛んだった。

他方、武力をもって対抗勢力を打ち負かすというところはほとんどなかった。対外戦争もなく平和だった。

自然の恵みに感謝し、列島に人間が住みついて以来長期間で変化してきた環境に、千三百年前に突如その文化が破壊され、利用価値のあるものは奪われた。

その地点に戻って、歴史をやり直すということをお願いするのである。

東北再興は懐古趣味ではない

もちろん、目指す東北再興とは、千三百年前の東北を復元することではない。

まずは、「東北自治」を目指すことがある。「独立」には至らなくとも、地方に大きな権限のある地方自治を獲得することである。

そのためには経済的な自立は不可欠である。

大都市圏を経由しての海外貿易ではなく、東北から直接世界に打って出る。新たな「東北交易圏」創出。

沖繩にならえ

これらは夢物語ではない。沖繩という目標とすべきお手本がある。沖繩は、沖繩文化と歴史を住民が共有することで、沖繩の政治があり、沖繩の経済があるという構造。沖繩にならえ、長い衰退の歴史のなかで埋もれた東北アイデンティティを発掘することが先決である。

その発掘作業が想定通りにいけば、おのずと再興の道は見えてくると信じる。

その発掘は、まずは千三百年前の東北の掘起しである。そのときに何が起きたのかを冷静に見つめることである。それを実現した時が、東北再興の基礎工事となるのである。



砂越豊著一【東北独立】



かつてはふたつのクニだった

当新聞による大胆近未来推理

新型コロナウイルス爆発的感染が終息してからの世界と日本と東北はどうなっていくのか

新型コロナ感染問題に 一極集中しすぎる世界

このところ、テレビも新聞も、まるで他に事件も新たなニュースもないかのようになり、新型コロナ感染関連の番組と記事が満載である。国内だけでなく、世界中で同様の状況が展開している。SNSの世界も同様だが、こちらの分野はさらに事態が悪化し、険悪な状況が頻発していると感じる。

感染者を増やすなど、にわか作りの「正義の使者」が、厳しい感染防止対策を守らない他人をヒステリックに非難・攻撃する光景も見慣れて、聞き慣れてしまった。

また、未知のウイルスの攻撃に何も反撃できないフラストレーションからか、事態が好転しないことにより立ち、政府をはじめとして、誰かれ構わず攻撃するのも見あきた。

ほんとうにこうした状況でいいのかと思いつつ、当新聞もこの件についてまったく触れない訳にはいかなないので、この問題を取り上げることにした。

何が真実か分からない

国内では、特に、いわゆる「専門家」という方々がテレビの人気タレントのよう番組に出ずっぱりで、さも新型コロナウィルスについては何でも知っているというように、自信を持って発言している。

壊れたテープレコーダーのように、これでもかこれでもかというほどに同じことを反復して聞かされる。

また、危機には違いないのだから、筆者には必要以上の危機感をあおり立てるような発言を繰り返して、人々をさらに不安に陥れているように見えなくもない。

しかし、筆者を含めて、素人の視聴者は、さまざまな「専門家」のさまざまな見解を受動的に聞かされるのみ。

しかし、それを繰り返して聞いていると、「専門家」同士に「共通の見解」がないことに気づくのだ。

何が真実かを知りたいのに、これでは「専門家」が頼りにならない。

感染者の治療にあたる医療関係者、医療業界関係者も、感染者の爆発的増加を前にして、ヒステリックに「医療崩壊」を叫んでいる。

でも、この問題はもっと別次元の話のような気がする。

世界中を見渡すと、リーダーが、その地域の住民の不安を出来る限り解消するために、毎日、公の場で状況の推移を説明しているところもある。

状況が分らないと余計に不安を駆り立てるので、それはとても良いことだと思う。国内でもそうして欲しい。そして、刻々変化する状況を詳しく説明して欲しいし、いったい何が起きているのかを説明して欲しいものだ。

状況を部分的にしか知れない人間たちが周囲に喚び散らして良いことはひとつもない。混乱に拍車をかけるだけである。

状況は「総合的に」展開し、進展しているのである。それを適切に伝えて欲しい。

当新聞独自の新型コロナ感染問題への観点

当新聞が既存マスメディアの報道方針に追従しても何の意味もない。時間と労力のむだである。

いまの感染者数と死者数がどうなっていて、新たな問題が何で、どうなっているのかという観点は、既存のテレビ局と新聞社等に任せて、当新聞独自の観点からこの問題を考えてみたいと思う。

ウィルス感染はいつかは終息する。終息しない病気はないのだ。

そこで、当新聞は、新型コロナ問題の終息後に、この世界、日本、東北がどう変化していくのかを、項目別に分けて大胆に推理してみようと考えた。

既存のマスメディアは現状を追いかけるだけで手いっぱいであるから、この推論はぜひ分と目新しいはずだ。

世界に共通する変化

その①

感染終息してからの経済低迷が長期化する
感染終息の時期は正確に

は分からないが、より確実に言えるのは、各国の経済低迷が、感染期間よりもはるかに長くなるだろうということである。

感染期間を通じて、経済活動の大半がストップ状態である。

これを元に戻すための復旧期間も長期に及ぶだろう。さらに経済活動が以前のよう活発化していくには

もつともつと時間がかかるだろう。この間の苦悩は想像を超えている。恐ろしい。

世界に共通する変化

その②

元の日常は戻らない
一連の状況変化によって大きく変化していく日常から、元の日常を回復するのは不可能になるだろう。

人々の日常生活も、日常の経済活動も、政治も何もかもが変わっていくだろう。

以前に改善しなければと思っていた部分も変わり、その他の問題なかった部分も変わっていくだろう。

それほどに今回の問題は、世界中にインパクトを与えたのだ。

世界の一部地域に起こった自然災害ではないからである。世界中の人々を、このグローバルな社会が巻き込んだのである。

世界に共通する変化

その③

リーダーが変わる

また、変化する可能性がかなり大きいのが、各国、各地域のリーダーが変わることである。

この問題に対して、迅速かつ適切に対応できたリーダーと、そうでないリーダーがはっきり分かれた。

その兆候もほどんど現れ、そして変化が現実化するだろう。

支持者の信頼を勝ち得たリーダーと、信頼を失ったリーダーがはっきりしたのだ。

普段は、政治や経済、軍事でのリーダーとしての力量を問われているので、その方面での対策は十分に練られ、各リーダーが打ち出した方針に沿って対処してきたはずだが、今回はまったく異なる課題があらぬ方向から突然降ってきたのだ。

しかも、迅速かつ適切な処置だったかどうかは、数字に明確に出る。残酷な評価だが、それは避けられない。

世界に共通する変化

その④

グローバル経済は縮小

次は、これまでグローバル化推進の旗のもとに世界に急速に浸透した経済交流が急速に萎んでいくだろうということ。

グローバルな経済交流と同じ勢いで、新型コロナウィルス感染も世界中に一気に拡大した。

「鬼がつくった日本刀」

約千三百年前、東北の地から全国に連れ去られた多くの奥州刀鍛冶たちがいた。しかし「鬼」と蔑まれ、苛酷な労働を強いられながらも、数々の名刀をつくり続けた。だが古代から中世にかけての日本刀の名工といわれた刀工のほとんどが奥州刀鍛冶の流れを汲んでいたにもかかわらず、その後すっかり忘れ去られてしまった。



埋もれた歴史を発掘するドキュメンタリー
【鬼がつくった日本刀①】

この問題に懲りた世界中の国々は、行き過ぎたグローバル化に一定の歯止めをかけるだろう。仕方のないことである。

そしてグローバル化の見直しはどこに向かうだろうか。

生産拠点の国内回帰現象が世界的に発生するのではないか。

今回の問題等により国際分業が破壊されると大変なことになるとみな恐れ、国際分業から国内完結型にシフトしていくだろう。そして、それは日本も例外ではない。

すでに極端な安価労働力は少なくなっているし、その他のリスクと考え合わせると、国内回帰の方が安全で有利であるという見方が浸透していくにちがいない。

そうして、世界の経済交流は縮小して、小規模の自国主義が少しづつ浸透して行くような気がする。

世界に共通する変化

その⑤ 中国の勢いは鈍化する

この問題が発生する以前に米中間のさまざまな軋轢は生じていたが、今回の問題で大きく傷つくのは中国だろう。

急激な経済成長と、なりふり構わぬ傍若無人な他国への進出を快く思っていない中国の国々は、今回の問題で中国との距離を取ろうとするだろう。

経済だけでなく、経済を背景にした政治でも陰に陽に他国に影響を与え続けてきた中国だが、これに加えて病気になる影響まで与えるとなると、反応はより厳しくなるにちがいない。

これも仕方がない。

世界に共通する変化

その⑥ アメリカは混乱する

同じく、米中間のさまざまな軋轢があったアメリカであるが、混乱する可能性が高いと予測する。

まずはトランプ支持派と反対派は、今回の問題に対する大統領の対応に関して、評価が真っ二つに割れて、ますます溝を深めるだろう。

大統領選挙が今年の十一月にある。あと半年とちょっと。対立激化の結末はどこへ辿り着くのだろうか。

こへ辿り着くのだろうか。選挙にどちらの陣営が勝つても、分断したアメリカは元に戻らないだろう。

また、バブルとも言われたが、比較的順調だった経済も、今般の問題でガタ落ちになる。まちがいでなく経済は混乱する。

世界に共通する変化

その⑦ 人種差別が横行する?

望まない予測ではあるが、今般の問題で世界の経済は大きく落ち込む。

これまでも先進国をはじめめとして落ち込んでいたのに、さらに落ち込み、世界全体でマイナス成長が想定されている。

それが各国の国民生活に甚大な影響を与える。

今回の問題ですでに大量の失業者が発生している。さらに失業者は増加するにちがいない。

失業しても、どこかに就職できるならば助かるが、倒産する企業が増えるとうなるか。行き場がない。

出口のない真つ暗なトンネル、未来が見えないトンネルに皆が放り込まれることになる。

そのやり場のない怒りはどこに向かうか。

まずは、すでにアメリカ国内で起きている中国憎しという感情が世界中にまん延していくのではないかと心配している。

加えて、アジア人にも、その感情が拡大しないことを祈るのみである。

中東からの移民問題にアジア人問題が追加されることのないように祈る。

日本の変化

その① 大量失業者と倒産企業増加

大量の失業者と倒産する企業の増加は避けられない。

特に飲食業、旅行業、映画・演劇などさまざまな文化事業会社や団体の倒産、解散も増える。それらの分野にとどまることなく、失業と倒産の嵐が吹き荒れる。

この問題が終息してもな

かなかすぐには元通りにはならないだろう。

旅行・観光は、外国人観光客をあてにしてにぎわっていたのが、それらが見込めなくなる可能性は高い。

とすれば、そこに携わっていた企業、労働者は、別の産業にシフトする可能性が高い。

最も楽観的な見方としては、いま不足している分野に流れ込むのではないか。

世界で起きているリーダーの交代劇の影響は日本も例外ではない。

すでにその兆候が現れているように感じる。

国民が感染終息を機に冷静さを取り戻すとき、また、経済の落ち込みを目の当たりにしたとき、この課題は加速することだろう。

その結果はどうなるだろうか。

日本の変化

その② 政治的混乱

世界で起きているリーダーの交代劇の影響は日本も例外ではない。

すでにその兆候が現れているように感じる。

国民が感染終息を機に冷静さを取り戻すとき、また、経済の落ち込みを目の当たりにしたとき、この課題は加速することだろう。

その結果はどうなるだろうか。

日本の変化

その③ 既存の習慣に変化

元の日常に戻らないのは日本も同じ。

何が消えて、新しい何かと入れ替わる。

ネットによる自宅勤務などが導入されているが、そんなことは入り口でしかないような気がする。

もっと重要な部分が変わっていくだろう。

東北の変化

その① 東北の被害は少ない

今回の感染被害は大都市圏に集中しており、地方は少ない。特に東北は少ない。もともと人口が少なく、人口密度も少なく、意図せずして「社会的距離」がほとんどのエリアで保たれているからではないか。

感染者が発生しても、大都市圏からの感染者流入が感染の主要原因なのだろう。

この点で、いつまでも極端に神経質になると、「鎖国状態」になるが、それだけは避けたいものだ。

東北の変化

その③ 人口流入の可能性

東北にとって好都合のこうした兆候が、これまで人口流出一辺倒だった流れを逆流させる可能性もあるのではないか。

そうすれば、東北は長期の低迷のなかから、少し明るい兆しが見えてくるのではないだろうか。

大いに期待したいものだ。

東北の変化

その② 東北が見直される

大都市圏での感染者割合

埋もれた歴史発掘ドキュメンタリー映像【鬼がつくった日本刀】上映会のお知らせ

下記の上映場所と日程についてはあくまで暫定です。感染の状況により変更の可能性があることをあらかじめご了承ください。

東大和市会館ハミングホール 「小ホール」
(〒207-0013 東京都東大和市向原6-1)

西武拝島線「東大和市駅」より徒歩7分

2020年5月27日(木) 上映開始 19:00

2020年7月4日(土) 上映開始 10:00

順次、宮城県での上映会開催予定

上映時間：約60分

入場料：500円(税込) 全席自由席

DVD - 3月下旬販売開始

3300円(税込) 送料無料

解説本(カラー) - 4月販売予定

問合せ先：株式会社遊無有

mail: y.s.yumuyu@ozzio.jp



埋もれた歴史を発掘するドキュメンタリー【鬼がつくった日本刀②】



第68回

水産業再興のための料理レシピ紹介

【旬の三つ葉とタラコの和え物】



郷土料理愛好家
松本由美子氏

三つ葉が旬なので、タラコと簡単に和えました。春の味がして、美味しかったです。今、魚類が値下がりをして、かなり安くなってきてます。例年の2、3割り安いようです。
(松本談)

【第43回 三陸酒海鮮会代替日程未定のまま】

延期を余儀なくされた3月14日の三陸酒海鮮会ですが、代替日程が未定のまま推移しております。東京都の居酒屋さんは完全な休業ではありませんが、夜間の営業は自粛のようです。美味しい日本酒への恋しさが募っておりますが、みなさま、しばし我慢。よろしく願いいたします。



長根貝塚



横穴古墳



日本初の産金

==== DVD 広告 【涌谷 7000年の歴史】====
宮城県北部にある小さな田舎町である涌谷町。しかしこの町は古代史研究にとって非常に興味深い町でもある。日本古代史の激動の時代の痕跡がいくつも残っている。それを再発掘した映像のDVDを紹介。



DVD - 涌谷 7000年の歴史

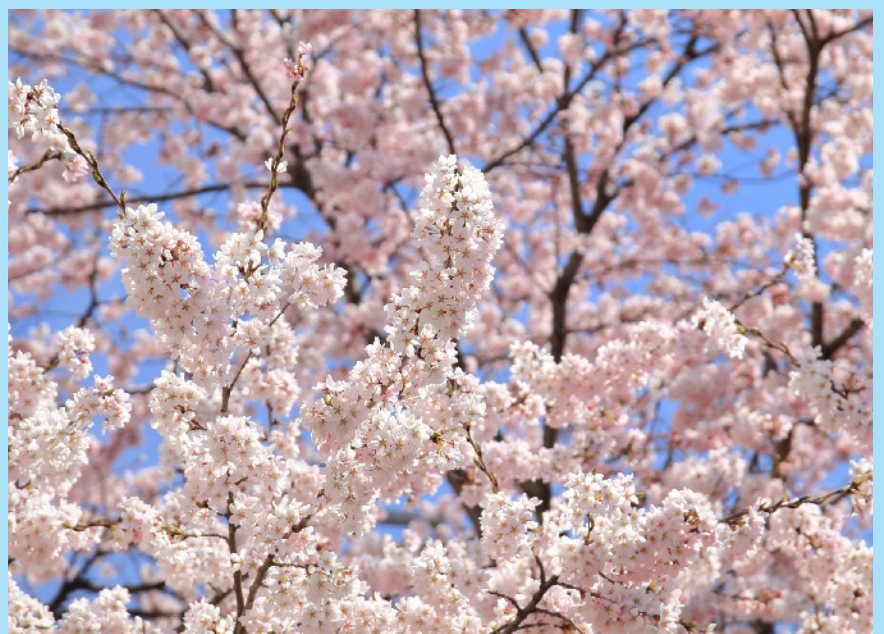
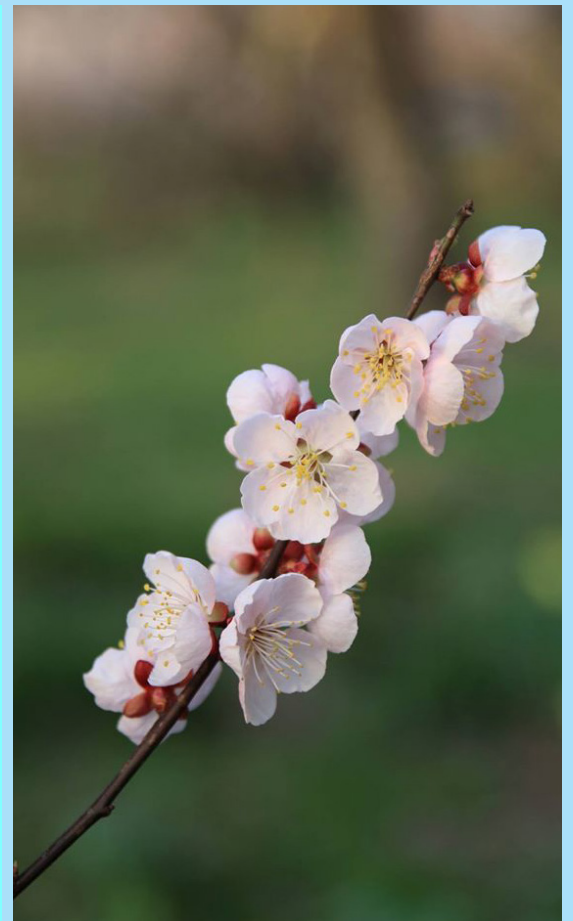
【涌谷 7000年の歴史】
涌谷町には実に7000年の歴史がある。この長い歴史を代表的な5つの歴史遺産であらわし、地元涌谷高校生4人が文化財保護職員のリードで学習していくプロセスを撮った映像。深く学習していくにつれ町の歴史という枠組みを飛び越え、日本という国家が出来ていく古代の激動の真ただ中にタイムスリップしていく。映像は117分の長編。
DVD 販売中 3300円(税込)
送料無料 問合せ: 株式会社遊無有 mail: y.s.yumuyu@ozzio.jp



写真でお伝えする
東北の風景

バーチャル
花見

写真撮影 尾崎匠



新型コロナウイルスの感染拡大がもたらしたものの感染拡大

新型コロナウイルスの感染拡大

新型コロナウイルスによる感染拡大が止まらない。二〇一九年一月に中国の武漢市で確認された新しい

コロナウイルスによる感染は、中国全土に広がり、次いで世界各国でも感染が確認された。日本で初めて

感染が確認されたのは今年一月十四日、神奈川県内においてである。その後しばらく

感染者数の増加は緩やかであったが、三月下旬になって首都圏を中心に感

染者が急増し始めた。その結果、今日七日に「緊急事態宣言」が出されるに至った

のは周知の通りである。NHKの調べによると、四月一三日現在、国内の感

染者数は七四〇四人で、うち重症者は一七人、死者一三七人、退院者七十四人

となっている。都道府県別に見ると、東京が二〇六八

執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagnasi/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo>

東北の状況は

東北で最初に感染者が確認されたのは二月二十九日、仙台市内においてであった。その後、東北でも感染者数が

少しずつ増え始め、四月一三日現在、宮城の五一人を筆頭に、福島と山形が

三十八人、青森が二十二人、秋田が一五人で、岩手はまだ感染が報告されていない。

今のところ、増加のペースは遅いが、いつ何時首都圏のように急激な増加曲線を描くようになるかから

ない。現在の宮城の状況は三週間前の東京の状況と同じだという専門家の指摘も

ある。実際、宮城県は先週六日には感染者が二六八人だったので、六日間では倍

になったことになる。他県でも、福島は一六人が三八

人、山形は一三人が三十八人、青森は一一人が三二人、秋田が一一人が一五人と、依然感染者が確認されていない岩手を除いて、いずれも感染者が増加している。東京に見られるような感染の急拡大の再現を阻止すべく、あらゆる対応が求められる時期に入ってきていると言

える。首都圏に出されている緊急事態宣言とそれに基づく要請は東北にとっても他人事ではない。これに準じた行動を自主的に取るこ

とによって、さらなる感染拡大を防げるのではないかと考える。

新型コロナウイルスについて分かってきたこと

SARS-Cov-2と名付けられた今回のコロナウイルスは、新型と言う通り、新しく確認されたコロナウイルスである。これまで人に感染するコロナウイルスは六種類が知られており、うち四種類はいわゆる

風邪の原因となるものである。残る二種は、二〇〇三年に流行し、重症急性呼吸器症候群を引き起こしたSARSウイルス(SARS-Cov)、二〇一二年に流行し、中東呼吸器症候群を引き起こしたMERSウイルス(MERS-CoV)で、致死率がいずれも一〇パーセント前後にも達する、恐ろしいウイルスであった。

今回の新型コロナウイルスはその名の通り、このSARSウイルスにゲノム構造が近いことが分かったのだが、致死率が当初一パーセント未満とされ、SARSウイルスほど高くなかったために、感染対策にも油断を招いてしまった節がある。しかし、時間が経つにつれて、この新型ウイルスが実に狡猾で、油断のならない危険な存在であることが分かってきた。

これまで分かっていることをまとめてみると、潜伏期間は一から四日、インフルエンザと違ってこの潜伏期間中も他人に感染させるリスクが高い。環境中の感染力保持時間は最大で実に三日間に達するとの論文報告がある。当初、高齢者や慢性疾患を持つ人が重症化すると言われていたが、その後基礎疾患のない若い人でも死亡例が確認され、乳児の感染も確認されている。熱帯でも流行していることからインフルエンザのように気温が高くなると終息するわけではない。

現在のWHOの発表では致死率は二パーセントで、インフルエンザと比較すると高いが、SARSウイルスよりはるかに低い。にもかかわらず、こうした特徴を持つが故に、SARSウイルスとは比較にならないくらい広範囲に感染が広がり、その結果死亡者数も比較にならないくらい多数に上っている。SARSの患者数は全世界で八四三九

人、そのうち死者は八一二

人だった。しかし、今回の新型コロナウイルスでは現在までに全世界でおよそ一七四万人が感染し、死者も一〇万八〇〇〇人余りに上っている。致死率が高いながらも感染者数自体がそれほど多くならないうちに封じ込めに成功したSARSウイルスよりもはるかに手ごわく、人類に対する大きな脅威となっていることが分かる。

「医療崩壊」への危機と対応

医療従事者の感染も拡大している。感染予防に関する知識を備えている医療従事者が感染するというのはよほどのことである。イタリアでは何と一〇九人もの医師が新型コロナウイルスの感染症で命を落としたという。その背景には、防護用の資材が不足していることが挙げられている。新型コロナウイルスの感染症ではない別の疾患や事故などで運び込まれた患者が陽性だったという事例も報告されている。一たび院内感染が起ると、重症化する患者が出る一方、医療従事者は働き続けることができなくなり、残った医療従事者への負担が増し、対応し切れなくなるリスクが生じる。

このような時こそ、医療機関同士の連携、協力が重要になる。東北には東北地域感染危機管理ネットワークがある。元々、仙台市内

の一八の医療機関が連携してできた宮城感染コントロール研究会がその始まりだが、今や六県、五〇〇施設が参加しており、感染対策情報を共有すると共に、感染対策でも協力、連携を行い、感染症相談窓口の設置や施設の枠を超えた院内感染対策ラウンドを実施するなどの活動を行っている。

このような取り組みが今後ますます重要な意味を持つていく。

医療機関同士の連携の他にも、市民向けにも、東日本大震災の折に避難所での感染予防のためのマニュアルを配布するなどの支援活動を行ってきたが、今回の新型コロナウイルス感染症についても、いち早く市民向けの感染予防ハンドブックを公開した。ウェブ上でダウンロードできる。

一方、飲食店や旅行業など、人が集まることや人が移動すること、すなわち今回の新型コロナウイルス対策で禁忌とされてしまった行動に関わる業種は厳しい状況にさらされている。私の足を運んでいた飲食店のうち、二つの店が今月末で閉店することになった。新型コロナウイルスが早期に終息しなかった場合に、どれくらい飲食店が同じ道を辿るのか想像もつかない。

もちろん、支援の動きも出てきている。例えば、仙台では仙台市内、宮城県内

の飲食店を応援しようと「愛する店ドットコム仙台」というプロジェクトが立ち上がった。クラウドファンディング形式で、自分が支援したい飲食店に対して「食事券」の購入という形で支援ができる。二〇〇〇円から一〇万円の間に支援し、支援の見返りとして後日支援した金額の一割増の食事券を受け取れるというものである。

このような形の支援をもっと大々的にできないものだろうか。国による支援はあまりに遅いし、しかも不十分である。支援の姿勢も消極的にすら見える。とすれば、そちらをあてにするのは後回しにして、民間ベースで互いにできる支援を考えていきたい。

飲食店側も手をこまねいて見ているわけではない。テイクアウトやデリバリーに対応する店が増えてきた。感染拡大防止の観点から、店内で飲食するのは憚られるにしても、他人と濃厚接触するリスクが低いテイクアウトならという需要は間違いなくある。よく引用されるダーウィンの言葉「変化に対応するものが生き残れる」、まさにその通りである。厳しい状況だが諦めずに生き残るために知恵を絞りたい。

時化の時の仕事

新型コロナウイルスは個人の生活にも大きな影響をもたらした。密閉・密集・

密接の「三密」の回避、不要不急の外出の自粛などがその典型的なものだが、これによって人と人とが集って交流する機会が大きく奪われることになった。仲間と毎月開催してきた交流の場「せんカフェ」も中止を余儀なくされている。毎回楽しみにしていた方からは「みんなと話ができなくて寂しい」との声もいた

ているが、感染拡大に歯止めが掛からないうちは再開するのは残念ながら難しいと思うので、本当に申し訳ない思いでいっぱいである。

一方で、こうした状況に対応して新たな形での会の開催に乗り出したところもある。滋賀県東近江市でやはり集いの場を設けてきた「三方よし研究会」は、今月の会を「ZOOM」を用いたウェブ会議とYouTubeのライブ配信で開催する、とのことである。今までは、遠方にいる私はこの会にはおそれと参加できず、毎回の活動報告に目を通すくらいしかなかったのだが、この方法であれば何の負担もなく「参加」できる。新型コロナウイルスの感染拡大への対応が別のメリットをもたらすということもあるの

である。そしてまた、こうした時だからこそやるべきこともひよっとしたらあるのではないだろうか。「時化の時」には時化の時の仕事がある」と漁師は言う。時化で海が荒れている時には船は

出せない。しかし、そういう時には倉庫に籠もり、普段はできない大掛かりな網直しや道具の手入れ、改良などを行うのだそうである。そして、時化の後にはたくさん魚が獲れることが多いという。今の状況はまさに「時化」の時と言えるのではない、大時化である。しかし、だからこそ、今できることにも目を向けた。本紙で創刊号から共に連載を続けてきた盟友のげんさんは現在休載している。この状況を受けて、ご自分の創作活動に専心することである。

今日八日の日本経済新聞でフランスの経済学者であるジャック・アタリ氏へのインタビュー記事が掲載されていた。氏は、「日本はどう危機から脱するでしょうか」との記者の質問にこう答えている。

「日本は危機対応に必要な要素、すなわち国の結束、知力、技術力、慎重さを全て持った国だ。島国で出入国を管理しやすく、対応も他国に比べると容易だ。危機が終わったとき日本は国力を高めているだろう」

今はまさに、未曾有の危機に対応しつつ、一人ひとりが力を蓄えるための時期と捉えたい。あの時のことがあったら今がある、と後で言えるような。

密接の「三密」の回避、不要不急の外出の自粛などがその典型的なものだが、これによって人と人とが集って交流する機会が大きく奪われることになった。仲間と毎月開催してきた交流の場「せんカフェ」も中止を余儀なくされている。毎回楽しみにしていた方からは「みんなと話ができなくて寂しい」との声もいた

ているが、感染拡大に歯止めが掛からないうちは再開するのは残念ながら難しいと思うので、本当に申し訳ない思いでいっぱいである。

一方で、こうした状況に対応して新たな形での会の開催に乗り出したところもある。滋賀県東近江市でやはり集いの場を設けてきた「三方よし研究会」は、今月の会を「ZOOM」を用いたウェブ会議とYouTubeのライブ配信で開催する、とのことである。今までは、遠方にいる私はこの会にはおそれと参加できず、毎回の活動報告に目を通すくらいしかなかったのだが、この方法であれば何の負担もなく「参加」できる。新型コロナウイルスの感染拡大への対応が別のメリットをもたらすということもあるの

である。そしてまた、こうした時だからこそやるべきこともひよっとしたらあるのではないだろうか。「時化の時」には時化の時の仕事がある」と漁師は言う。時化で海が荒れている時には船は

出せない。しかし、そういう時には倉庫に籠もり、普段はできない大掛かりな網直しや道具の手入れ、改良などを行うのだそうである。そして、時化の後にはたくさん魚が獲れることが多いという。今の状況はまさに「時化」の時と言えるのではない、大時化である。しかし、だからこそ、今できることにも目を向けた。本紙で創刊号から共に連載を続けてきた盟友のげんさんは現在休載している。この状況を受けて、ご自分の創作活動に専心することである。

今日八日の日本経済新聞でフランスの経済学者であるジャック・アタリ氏へのインタビュー記事が掲載されていた。氏は、「日本はどう危機から脱するでしょうか」との記者の質問にこう答えている。

「日本は危機対応に必要な要素、すなわち国の結束、知力、技術力、慎重さを全て持った国だ。島国で出入国を管理しやすく、対応も他国に比べると容易だ。危機が終わったとき日本は国力を高めているだろう」

今はまさに、未曾有の危機に対応しつつ、一人ひとりが力を蓄えるための時期と捉えたい。あの時のことがあったら今がある、と後で言えるような。

密接の「三密」の回避、不要不急の外出の自粛などがその典型的なものだが、これによって人と人とが集って交流する機会が大きく奪われることになった。仲間と毎月開催してきた交流の場「せんカフェ」も中止を余儀なくされている。毎回楽しみにしていた方からは「みんなと話ができなくて寂しい」との声もいた

ているが、感染拡大に歯止めが掛からないうちは再開するのは残念ながら難しいと思うので、本当に申し訳ない思いでいっぱいである。



雨上がりの梅の花



河川焼却



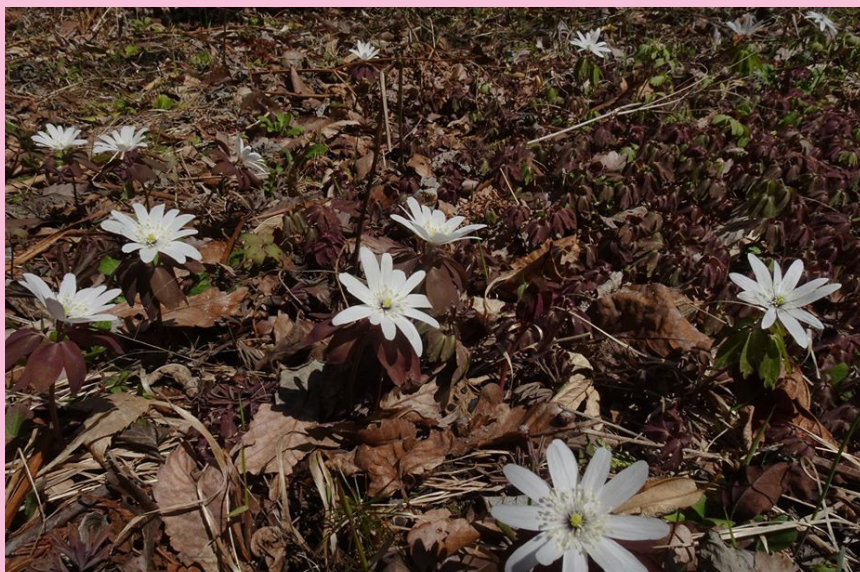
ドングリの発芽



夫婦バツケ

いま、日本も世界もコロナパンニックで大騒ぎ。パンニックはだんだん巨大化し、もともと形なきものが「実害」まで包含するまでとなったが、あらためていったい何のための騒ぎなのかと立ち止まって考えてみるとただただ不思議である。人間という種は、大自然という不動の基盤を忘れ、人工的な環境ばかりに在ると、パンニックに踊らされるという典型的な見本である。こういう時はゆっくり旅行でもして、浮世の騒ぎを忘れたいと思うが、不要不急の外出は遠慮せよというならば、遠野の景色をみて心慰めるとしよう。この時期は、三寒四温で、寒と温の両方の景色が見られる。

シリーズ 遠野の自然
「遠野の清明」
遠野 1000 景より



アズマイチゲ



朱色と雪



早春の林道



開花を待つサンシュ

大災害と危機に遭遇して思う 危機におけるリーダーとは 平時は忘れていたが、組織のメンバーは、危機の際に リーダーに命を託していることによく気がつく

近年のリーダーは「軽くなった」

最近、政治の中心部から、「神輿は軽いほどいい」というような、いかにも世事に長けたような発言がちらほら聞こえてくる。

リーダーは単に神輿のように担がれていればよく、大した能力なく、また重要な役割を担う必要がなく、むしろ中途半端に出来る扱いにくいという意味なのだろう。

それは、「陰」で権力を操ろうという輩にはまことに好都合の構造である。何かまずい状況になったら、トカゲの尻尾切りをすれば、「陰の実力者」は安泰である。「陰」に責任が

学校でもリーダーについて教えない

学校教育でも、リーダー基礎教育のひとつとしてのリベラルアーツはおろそかにされ、専門教育にもっと時間を割くという声が産業界から聞こえてくる。

リベラルアーツは単なる一般教養と誤解されていて、専門教育のための基礎教育と位置づけられている。

しかし一般教養と、リベラルアーツの本来の意味である「教養を高める教育」とは別物である。

手垢のついた一般教養は意味がないかもしれないが、「教養」を「高める」教育はリーダーにとっての大事な基礎教育であると思う。

及ぶこともなく、神輿の人物を入れ替えれば、相変わらずの構造が続くというのだろう。リーダーかたなしである。

話は変わるが、子供の世界でも成績優秀で真面目なリーダーは敬遠され、面白くて人気者のリーダーが選ばれるようになって久しい。

これは親の影響大である。小学校で、全員で手をつないで、全員が同じタイムで走る徒競走をしたり、学芸会で主役が何人も出現する構造と相通じるものがみと取れる。

集団を抜き出ているものへの嫉妬が強く影響していると感じられる。

平和な時代といえれば言えなくもない。

変革期のリーダー、非変革期のリーダー

それでも平時のリーダーの能力差は表向きあまり感じられないかもしれない。

非変革期のリーダーも同様で、表面的に能力差を感じる場面は少ないだろう。

どちらの環境下でも、リーダー、あるいはリーダーの能力が組織を動かしていくのには、安定したシステムが動かしていくからである。システムを破壊しようとしなければ、組織は平穩無事に進行するように見える。リーダーはシステムが決めた通りに業務をこなしていけばよい。

そのため、だれがリーダーをやっても変わらないうだれもが思い込むだろう。

変革期のリーダー、非常時のリーダー

ところが、いつの時代も凡庸なリーダーでも務まるかといえ、そうではない。

そうした点で、この国のリーダー教育はお粗末極まりない。

リーダーを育成する気がないようなメニューばかり並んでいるのではない。

あるいはリーダーを補助するサポート役だけを大量生産する教育システムというべきだろうか。

リーダー不在のサポート役ばかりの組織を想像すると、そうした組織は想像以上に多い現代ではないか。

平時のリーダー、非変革期のリーダー

それでも平時のリーダーの能力差は表向きあまり感じられないかもしれない。

非変革期のリーダーも同様で、表面的に能力差を感じる場面は少ないだろう。

どちらの環境下でも、リーダー、あるいはリーダーの能力が組織を動かしていくのには、安定したシステムが動かしていくからである。システムを破壊しようとしなければ、組織は平穩無事に進行するように見える。リーダーはシステムが決めた通りに業務をこなしていけばよい。

そのため、だれがリーダーをやっても変わらないうだれもが思い込むだろう。

平時に愚鈍なリーダーを選んだ結末

では、非変革期にふさわしいリーダー、危機時に適したリーダーはいつ選ぶのか。

それは、残念なことに、平時であり、非変革期である。

非変革期の直前、危機時の渦中に、凡庸リーダーに

変革期の真つただ中に凡庸なリーダーを選んでしまった組織は不幸である。

時の流れと状況に押し流され、最終的には、その渦のなかに消えていくであろう。

変革期のことなど何も学んでいないから、学んでいないことをその頭脳から導き出し、対応を絞りだすこととはないのである。

時代の変化、状況の変化の前になすすべなく埋没しただただ流されていくしかない。

非常時はもつと大変である。組織のメンバーの生命にも関わってくる。

そうした危機にあつて、最も進んではならないあらゆる方向を指示して進むかもしれない。もともと危険な状況のなかでさらに危険を増し、自ら消滅を早める可能性が高い。

大方、消滅の可能性を前にして、組織のメンバーたちはあわてふためき、なぜこんなリーダーを認めてしまったのかと嘆くだろう。

しかし、後の祭りである。

替えて有能なリーダーを選び直すことは不可能である。おそらく凡庸なリーダーは、リーダーの座にしがみつき、離さないだろう。

その結果、組織を消滅のリスクにさらすことになる。都合よくはいかないのだ。

平時に有能なリーダーを育成し選び継承する

だから、平時から、万が一に備え、有能なリーダーを育成し、選んでおくことが何よりも重要である。そして、その流れを固く継承すべきである。

一時的怠慢で、ちようど運悪く、凡庸なリーダー在任時に危機にめぐり会ったならば悔やんでも悔やみきれない。

リーダー選びは、組織にとって最大優先課題だと、メンバーがいつも共有しておくべきである。

もし凡庸なリーダーを輩出したら、次の世代も凡庸なリーダーを覚悟しなければならぬのだ。

凡庸からは凡庸しか生まれない。しかも何世代も続く可能性が大きい。

途中で有能なリーダーに入れ替えるには余程の幸運がなければむずかしい。堂々巡りのような話だが、これが有能なリーダー育成と選出ではないか。

東日本大震災を振り返る時、被災地も被災者の方々も、また、犠牲となられた方々がもし何かを述べる機会があつたと仮定したら、リーダーの大事さをまず第一に挙げるのではないか。

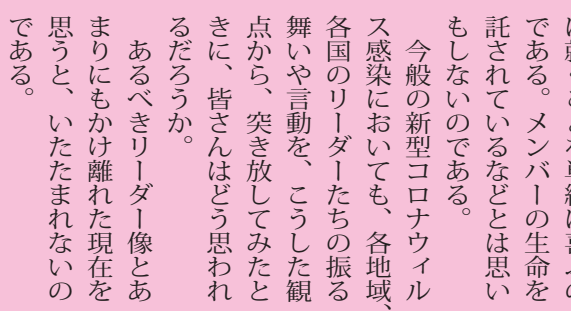
震災が発生して後のリーダーシップにおいても、いや発生する前からも、痛切にリーダーというものがいかに大事であるかを述べられるのではないだろうか。

そしてリーダーとは、そうした大災害発生時にも、発生する前の状況の時も、自分たちの生命を託する存在であることを力説されると思うのである。

リーダーとは、そうしたとても重い役割を担う存在であり、軽々しくその任にあたるものではないと思う。しかるに凡庸なリーダーは、滑稽にもリーダーの座に就くことを単純に喜ぶのである。メンバーの生命を託されているなどとは思えないのである。

今般の新型コロナウイルス感染においても、各地域各国のリーダーたちの振る舞いや言動を、こうした観点から、突き放してみたときに、皆さんはどう思われるだろうか。

あるべきリーダー像とあまりにもかげ離れた現在を思うと、いたたまれないのである。



中国のリーダー



アメリカのリーダー



北海道のリーダー